



TITLE:

アブドゥッラー・フサインの子ども時代--英領期マラヤの覗き見を通じたメディア体験

AUTHOR(S):

西, 芳実

CITATION:

西, 芳実. アブドゥッラー・フサインの子ども時代--英領期マラヤの覗き見を通じたメディア体験. CIRAS discussion paper No.92: 『カラム』の時代XI--マレー・イスラム世界の女性と近代 2020, 92: 54-60

ISSUE DATE:

2020-03

URL:

https://doi.org/10.14989/CIRASDP_92_54

RIGHT:

© Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

アブドゥッラー・フサインの子ども時代

英領期マラヤの覗き見を通じたメディア体験

西 芳実

はじめに

1950年代から1960年代にかけての「カラムの時代」には、それにさきだつ時代に、この地域に新聞・雑誌、教科書、小説、映画、ラジオといった近代的なメディアが導入され、それを通じて人々が生活世界を越えた地域のできごとを自らに関係するできごととして受け止め、また、メディアを通じて自らの存在や考えを直接会ったことのない人々に伝えようとする欲求や営みが人々の間に定着していく過程があった。

本稿では、1920年代から1930年代に、幼少期から中学卒業までの時期をクダからペナンにかけてのマラヤ北部地域で過ごしたマレーシアの国民文学者アブドゥッラー・フサイン (Abdullah Hussain, 1920–2014年、以下アブドゥッラー) の自伝『ある旅路』(Sebuah Perjalanan, 1985年)をもとに、この時期にマラヤ北部地方でマレー語を母語として生まれ育った子どもの文化メディア体験を整理する。

アブドゥッラーは、長編小説『連結』(Interlok, 1971年)がマレーシアの学校必読書に選定されているほか、映画俳優・監督のP.ラムリー (P. Ramlee)、「マレー語文法の父」ザイナル・アビディン・アフマド (Zainal Abidin Ahmad, 通称ザアバ (Za'ba))、民族主義的文学者ハルン・アミヌラシド (Harun Aminurrashid)、「サバ開発の父」ムスタファ・ハルン (Mustapha Harun) といった著名人の評伝を執筆し、マレー語文学界に評伝の叙述スタイルを確立したことで知られる [Zeti 2008:5]。自身については、『ある旅路』、『言葉を探す旅』(Perjalanan Mencari Bahasa, 2001年)、『知恵を探す旅』(Perjalanan Mencari Hikmah, 2003年)、『自分を探す旅』(Perjalanan Mencari Diri, 2004年)の4部からなる自伝シリーズを残している。1950年代にはシンガポールで新聞・雑誌の編集者や記者として活動し、『カラム』の編集に参加して記事を寄稿しているほか、カラム社の映画雑誌『フィルム』(Filem, 「映画」)、

総合誌『ワルタ・マシヤラカット』(Warta Masyarakat, 「社会のニュース」、1954年創刊)、成人向け娯楽雑誌『アネカ・ワルナ』(Aneka Warna, 「色とりどり」、1954年創刊)の編集を担当した。

『ある旅路』は全10章¹⁾からなり、アブドゥッラーがクダ州に生まれてからスマトラ、シンガポールを経て1960年にクアラルンプールに移るまでが記されている。本稿では、同書のうち、スンガイリマウ村での子ども時代を記した第一章「村での暮らし」と、親元を離れてアロースターの中学校に通うようになった時期を記した第二章「町に溺れる」の記述から、アブドゥッラーが幼少期から青年期にかけてどのような文化メディア環境にあったのかについて、アブドゥッラーが接触した書籍、雑誌・新聞、映画・演劇とその接触の仕方に注目して整理する。これにより、「カラムの時代」を支える世代の人々が生育期に文化メディアをどのように利用することが可能であり、また、それを通じてどのような情報を得ていたのか、その一端を明らかにしたい。

1 村での生活と小学校(1920～1931年) ——幼少期の物語世界

アブドゥッラーは1920年3月25日にクダ州ヤンのスンガイリマウで生まれた。スンガイリマウはマラッカ海峡に面した海岸沿いの村で、クダ州の州都アロースターと州南部の中心都市スンガイプタニの間に位置する。スンガイプタニはクダ川をはさんでペナン州のウェルズリー地方(スブランプライ)と隣接しており、マラヤ北部地方の交易中心であるペナン島は目と鼻の先に位置していた。

アブドゥッラーが幼少期を過ごした1930年代のマラヤ北部地方は、イギリス植民地統治に伴うスズ産業やゴム産業の興隆を背景に流入してきた華人やイン

1) 村の子／町に溺れる／人生いろいろ／戦争勃発／行き当たりばったり／雑誌記者／映画スターがストライキする／ダルル・イスラーム(1)／ダルル・イスラーム(2)／1950年代の終わり。

ド人に加え、マラッカ海峡対岸のスマトラ島、とりわけアチェからの移民が居住する混成社会だった²⁾。

アブドゥッラーの父サイド・ニャ・フサイン（以下フサイン）はアチェのピディからの移民だった³⁾。19世紀末から30年におよぶアチェ戦争を経て20世紀初頭にオランダ東インド政庁の統治下に入ったアチェからは、オランダ統治を嫌ってマレー半島に渡る移民が多くみられた〔Reid 1979:9〕。フサインは単身で村を出て西アチェのムラボー、東アチェのランサ、北スマトラのランカットを経てマラッカ海峡対岸のクダ州に渡り、ピディからの移民が多く住んでいたスンガイリマウで地元出身のアイシャと結婚し、縫物の仕事をしながら5人の子を育てた。

幼少期のアブドゥッラーの生活世界は、スンガイリマウを中心としながら、両親や祖父母から実体験として聞かされる物語を通じて、スマトラから南タイ、ビルマにまで広がっていた（図）。母方の祖父アワンはスランプライ出身でペナンとの間で商いをしていたが、事業に失敗して逃亡し、ビルマ南方のブラウドゥア（Pulau Dua, Victoria Points）でゴム栽培をしていた。母方の祖母の四人目の夫で幼少期のアブドゥッラーを養育した祖父プテは、ペナンとペラで秘密結社の活動をしていたことがあり、北はタイ領のパタニ、西はオランダ領の東スマトラ⁴⁾、南はジョホール州ムアルまでをまたにかけ、イギリス人とシク教徒の警察やオランダ人の警察に追われたり、華人の秘密結社にかくまわれたりといった冒険譚をアブドゥッラーに繰り返し語って聞かせた。父フサインは、オランダに抵抗したためにアチェを追われて野生人が住む南の島に放逐されたトゥク・ブジャン（Teuku Bujang）の物語を好んでアブドゥッラーに聞かせた⁵⁾。



図 幼少期のアブドゥッラーの生活世界

スンガイリマウのマレー語小学校に通ってマレー語の読み書きができるようになると、アブドゥッラーが触れる物語の種類は増した。小学校では『マレー世界の歴史』（Sejarah Alam Melayu）シリーズ⁶⁾が教科書として使われ、アブドゥッラーの愛読書となった⁷⁾。また、校長室の書棚には、スルタン・イドリス教員養成学院から刊行された英語書籍のマレー語翻訳書が所蔵されていた。スコットランド人作家ロバート・マイケル・バラントイン（Robert Michael Ballantyne）の『サンゴ島』（The Coral Island/Pulau Karang）⁸⁾のような冒険小説、シャーロック・ホームズやセクストン・ブレイク（Sexton Blake）⁹⁾を主人公とする探偵小説、『ハムレット』、『ベニスの商人』、『ロミオとジュリエット』

イリアンジャヤに送られたという。

- 2) 19世紀末にマレー人の大規模移住が起こり、マレー半島西岸にはマレー半島内の他の地域やインドネシアからマレー人が移住し、地元生まれのマレー人の人口を外来系マレー人が凌駕する事態となっていた。ペナンにはアチェ産のコショウを取引するアチェ出身のアラブ人商人が拠点を有しており、この取引ネットワークを通じてマレー半島北部にアチェ人が流入した〔Kahn 2006:67〕。
- 3) 現在はインドネシアのアチェ州ピディ県を中心都市シグリの行政区内にあるカンブンアレ（Kampung Aree）村出身。フサインの父は村長で、父の死後は母が村長職についた。5人兄弟の長男で、兄弟のなかで出身村を離れて仕事探し〔Abdullah 1985:110〕をしたのはフサインだけだった。
- 4) 現在のインドネシアの北スマトラ州の東側に相当する地域。
- 5) 野生人に衣服や食物を与えて友人にし、野生人をイスラム教徒にするという物語で、アブドゥッラーは『ロビンソン・クルーソー』との共通点を指摘している。アブドゥッラーはのちにアチェでトゥク・ブジャン本人に出会い、物語が実話にもとづくことを知った。トゥク・ブジャンは北アチェの貴族の子で、アチェ戦争中、森でゲリラ戦を戦い、オランダに捕らえられてア

- 6) スルタン・イドリス教員養成学院の教員アブドゥル・ハディが1925年から1929年にかけて全3巻を執筆し、その後を引き継いだアブドゥル・ハディの同僚のブヨン・アディルが第4巻（1934年）、第5巻（1940年）を執筆した〔左右田 2018:119 n15〕。オランダ、イギリス、フランスの研究者による民族学、歴史学、考古学分野の著作に刺激されて執筆され、マラヤ、シンガポール、サラワク、ブルネイのマレー語小学校で教科書に使われた〔Rosli et al. 2010:22〕。アブドゥッラーは著者としてアブドゥル・ハディだけでなくブヨン・アディルの名前を挙げているが、刊行時期から考えてブヨン・アディルの巻を読んだのは小学校卒業後である可能性が高い。
- 7) 学校の教科では地理（ilmu alam）と歴史と作文に関心を持っており、特に地図を見るのが好きだった。教室の壁にはクダの地図と世界地図が貼られており、物語、歴史、地理の本を読んで新しい地名が出てくると地図上でその地名を探した〔Abdullah 1985:68〕。
- 8) 原作は1857年に*The Coral Island: A Tale of the Pacific Ocean*として出版された。南太平洋上で船が難破して孤島に漂着した3人の少年の冒険譚で、ジュブナイル小説の先駆けとして知られる。ヨーロッパ全土で翻訳され、20世紀初めのイギリスでは小学生向けの推奨図書に選ばれていた。
- 9) 1893年に少年向け週刊誌に掲載された冒険小説「失踪した百万長者」に登場し、1894年にはブレイクものの専門誌が創刊されるほどの人気を博した。ブレイクの専門誌が複数刊行され、英語以外の言語でも執筆され、著者は数百名にのぼった。

のようなシェークスピアの作品があった¹⁰⁾。小学校2年生の時に3年生と4年生の教科書を読み終えてしまったアブドゥッラーは、校長室の書棚から無断で書籍を持ち出して家で読み、内容を祖父に語り聞かせていた。

学校では小学校の教師が回し読みした新聞や雑誌が机の上に放置されていることがしばしばあり、アブドゥッラーは教師の目を盗んでそれらの新聞や雑誌を読んでいた。『リダ・ブナル』(Lidah Benar, 「真実の舌」)¹¹⁾、『エダラン・ザマン』(Edaran Zaman, 「時代の変転」)¹²⁾、『ブミプトラ』(Bumiputera, 「土地の子」)¹³⁾、『サウダラ』(Saudara, 「兄弟」)¹⁴⁾、『バツテラ』(Bahtera, 「方舟」)¹⁵⁾といったペナンやクランで刊行され新聞・雑誌で、いずれもジャウィで書かれていた。

アブドゥッラーはヒカヤット(伝承物語)も好んで読み、とりわけ気に入っていたのは『ハントゥア物語』(Hikayat Hang Tuah)と『アミル・ハムザ物語』(Hikayat Amir Hamzah)のような冒険譚だった¹⁶⁾。『ハントゥア物語』を読んだ際には、ハントゥアが自らの血肉以上の存在だった親友のハンジュバと争わなければならなかったことに心を痛め、その原因となったハントゥアによる王への無条件の忠誠を疑問に思った。仲間のハンレキル、ハンレキウ、ハンカストゥリが2人の争いを前に手をこまねていることに驚き、彼らによって争いを避ける道はなかったのかと考えた。また、『アブドゥッラー物語』(Hikayat Abdullah)と『アブドゥッラー航海記』(Kisah Pelayaran Abdullah)は、著者であるアブドゥッラーの自伝として物語が展開

するため、アブドゥッラーはあたかも自分の物語であるかのように楽しんで読んだ。

アブドゥッラーの両親と祖父母は文字を読まなかったが、自宅にはジャウィで書かれたヒカヤットの冊子が置かれていた。小学校で習う綴りと異なっていたため最初は読むのに苦労したが、音読しているうちに内容がわかるようになり、『シ・ミスキン物語』(Hikayat Si Miskin)、『孤児ムスタファ』(Yatim Mustafa)、『シティ・ズバイダ物語』(Hikayat Siti Zubaidah)などを読んだ。『トゥルン・ビビ物語』(Hikayat Terung Pipit)はクダ方言で書かれた5人の英雄の物語で、クダの地名や遺跡が登場するため、アブドゥッラーの祖父が好んでアブドゥッラーに繰り返し読ませていた¹⁷⁾。

読むことに強い関心があったアブドゥッラーは、父が一時期営んでいた食料品店で包装紙に使われていた新聞にも目を通していた。『デイリー・クロニクル』(Daily Chronicle)¹⁸⁾や『デイリー・メール』(Daily Mail)¹⁹⁾といったイギリスの新聞もあり、その子ども欄を通じてミッキーマウスやティディベアのことを知った。また、世界中の読者をメンバーとする文通欄があり、アブドゥッラーもメンバーになってバッジを受け取った²⁰⁾。

スンガイリマウの小学校には4年生までしかなかったため、5年生からアロースターの小学校に通った。アブドゥッラーはスンガイリマウから進級した他の同級生とともに教員のサイド先生の自宅で補習を受けた。サイド先生はスルタン・イドリス教員養成学院の出身者で²¹⁾インドネシア民族主義思想に傾倒しており、オランダ東インド政庁のバライプスタカが刊行する総合誌『パンジ・プスタカ』(Pandji Poestaka)²²⁾を

10) これ以外の翻訳小説としてアブドゥッラーは『モンバサ』(Mombasa)という作品タイトルを挙げている。モンバサはケニアの港町。原題は不明だが、1956年のイギリス映画『Beyond Mombasa』の原作とされるJames Eastwoodの小説『豹の爪痕』(The Mark of the Leopard)かもしれない。

11) 1929～1935年にクランで週刊で刊行された。カウム・トゥア(改革派)がカウム・ムダ(伝統派)に反論を示す場になっていたことが知られている[Hamed 2015: 52-54]。

12) 1925～1930年にペナンで週刊で刊行された。編集者と読者の投稿を除き、英語紙からの翻訳記事が誌面の多くを占めた[Hamed 2015: 43-54]。

13) ペナンで初のマレー語(ジャウィ)日刊紙として1933年1月5日に創刊された。短編小説を多数掲載し、ペナンの作家を刺激したことで知られる[Muhammad 2016: 102]。

14) 1928～1941年にペナンで刊行された。刊行当時は週刊で、1932年から週2回刊行になった。発行部数1,500部のペナン最大規模の新聞で、マレー半島北部で最も影響力があった[Hamed 2015: 49-51]。

15) 読み書きを身に付けたばかりの大人を対象に1931年にペナンで創刊された『デワサ』(Dewasa, 「大人」)の後継誌として、1932年からペナンで週2回刊行された[Hamed 2015: 69-70]。

16) 『アミル・ハムザ物語』は知り合いから借りて読んだ。

17) アブドゥッラーはこれ以外に『ハリス・ファジラ物語』(Hikayat Harith Fadzilah)、『タジュル・ムル物語』(Syair Tajul Muluk)、『スジャラ・ムラユ』(Sejarah Melayu)、『アワン・スルン・メラ・ムダ物語』(Hikayat Awang Sulung Merah Muda)を挙げている。『スジャラ・ムラユ』ではムラユの英雄がスルタンに『ムハンマド・アリ・ハナフィア物語』(Hikayat Muhammad Ali Hanafiah)を詠むよう求める場面が好きで、その物語を探したが見つけれなかったと述べている。また、『アワン・スルン・メラ・ムダ物語』は試練に負けない王子の物語で、あまりに気に入っていたため、のちにアブドゥッラーがオクスフォード大学出版会で仕事をするようになったときに新版の出版を担当したほどだった。

18) 1872年から1930年までロンドンで刊行されていた。

19) 1896年にロンドンで創刊されたタブロイド紙。

20) メンバーになるには登録料を送金する必要があったが、お金がなかったアブドゥッラーは登録料を支払わないままバッジを受け取った[Abdullah 1985: 62]。

21) 病気のため卒業できずに中退していた。

22) 1923(創刊予告号は1922)～1945年にバタヴィアで刊行されたローマ字表記マレー語の週刊誌。

購読していた。インドネシアのローマ字綴りはマラヤの綴りと異なっていたために読むのに苦労したが、アブドゥッラーはアチェからクダに移住した青年たちから綴りを教わって読めるようになり、アチェにいる親戚から父に届く手紙を文字を読めない父に代わって読むこともできるようになった。

2 街での生活と職探し(1932~1940年) ——文筆業へのかげ

アブドゥッラーは小学校を終えると、アロースターの名門校スルタン・アブドゥル・ハミド学院に進学して英語教育を受けることを希望したが、手続きのトラブルから入学を認められなかった。スンガイリマウの小学校で教員補佐をしながらイギリス人視学官の目にとまってスルタン・イドリス教員養成学院に進学する道が開けることを期待したが、これもかなわなかった。

失意のアブドゥッラーはアロースターの聖ミカエル学校 (St. Michael School) に入学した。日本人の校長のもとで華人とインド人が教鞭をとり、生徒もほとんどが華人とインド人だった。アロースターでは商売する人を対象にしたビジネス・スクールとみなされており、成績優秀な生徒はキリスト教徒になることと引き換えに外国留学の機会を与えられた。

アブドゥッラーは半年で聖ミカエル学校をやめ²³⁾、1933年にアロースターの英華学校 (Anglo Chinese School) に入り直した。学期途中だったが編入試験を受けて2年生に入り、その年の学年末試験で2位の成績を修めたために4年生に飛び級した。その後、学業を中断してバタワースやクリムで暮らした時期²⁴⁾を経て、ふたたび編入試験を受けて7年生を修了した²⁵⁾。

23) マレー語で学んだ内容を英語で学びなおす授業だったため、アブドゥッラーはなんなく良い成績を修めることができた。教室の壁のイエス・キリストの絵に落書きしたのを叱られたことをきっかけに父親に無断で退学した。

24) アロースターでの寄宿先だった親戚とトラブルになって友人と部屋を借りようになると、同世代の友人たちとの付き合いが増えた。サッカーやボクシングに夢中になりすぎて学業が疎かになり、学費の支払いも滞ったため、逃げるようにアロースターを離れ、クリムやバタワースで友人宅を転々とした。やがて父に見つかってスンガイリマウの実家に連れ戻されるが、居心地が悪そうにしているアブドゥッラーをみかねて父が再びアロースターの学校に行かせた。アブドゥッラーは英華学校の7年生への編入を希望し、試験に合格して7年生に入った。

25) 英華学校を卒業した年は公式には1935年とされている [Zeti 2008: 2]。ただし、アブドゥッラーが7年生に編入したとき、同期に入学した友人は5年生か6年生だったという記述があることから、卒業年は1937年以降だった可能性が高い。また、クリム時代に寄宿した友人は1938年からクリムに住み始めたという記述もあることから、英華学校の卒業は1938年以降だった可能性もある。英華学校はアブドゥッラーが卒業する際に閉校となったとの記述もあるが、閉校年は不明である。なお、アブ

英華学校では、かつてマレー語翻訳で読んだシェークスピアをはじめ、ミルトンやディケンズといった英文学の古典²⁶⁾を英語で学んだ。

学業面での希望をかなえられなかったものの、親元を離れて州都アロースターで下宿生活をしたことは、アブドゥッラーにマラヤの外から到来する様々な文物に触れる機会を与えた。街の書店では『ファリダ・ハスム物語』(Hikayat Faridah Hanum)²⁷⁾をはじめとするマレー語近代小説が売られていた²⁸⁾。アブドゥッラーは書籍を買う十分なお金を持っていなかったため、インド人の書店で立ち読みしたり、床屋においてある書籍を読んだりした。この頃、アブドゥッラーはシンガポールの雑誌『タナ・ムラユ』(Tanah Melayu, 「マレーの地」)²⁹⁾の「笑い話」欄に弟の名前で小話を投稿して掲載されている。

アロースターには映画館や遊芸場³⁰⁾があり、映画館ではアメリカ映画、エジプト映画、香港映画がかけられ、遊芸場ではダルダネラ劇団³¹⁾やボレロ劇

ドゥッラーによれば、試験に合格できたのは、クリムで英語の小説 (roman picisan) や英語の雑誌を、バタワースでは日本人がシンガポールで刊行した安価な英語新聞を読んでいたため、わずかながら世界情勢についての知識があり、簡単な質疑応答程度の英語力が身につけていたからだろうという [Abdullah 1985: 189]。別のところではバタワースで毎日読んでいた新聞を1939年創刊の『シンガポール・ヘラルド』としている [Abdullah 1985: 187]。

26) プロテスタント世界で最も多く読まれた宗教書とされる『天路歷程』を執筆したジョン・バニヤン (John Bunyan, 1628-1688年) の名前も挙げている。

27) エジプトのカイロを舞台にした西洋教育を受けたエジプト人の男女の恋愛小説で、マレー語による近代小説の嚆矢とされる。著者のサイド・シェ・アフマド・アルハディ (Syed Syekh Ahmad al-Hadi) はジュルトン・プレスを設立して『アル・イフワーン』(al-Ikhwan) や『サウダラ』を刊行してベナンの出版業をけん引した。『ファリダ・ハスム物語』の初版は2巻本で1925-1926年に刊行された。1958年にはカラム社から4巻本で刊行されている。

28) 一冊20~25センだった。アブドゥッラーは当時の主な著者としてアブドゥッラー・シディク (Abdullah Sidek)、シャムスディン・サレー (Shamsuddin Salleh)、アフマド・バフティアル (Ahmad Bakhitar)、ラジャ・マンソル (Raa Mansor) を挙げている。

29) 1933年3月創刊 [Hamedi 2010: 75]。

30) 映画館はEmpireとRoyal、遊芸場はKedah Amusement Park。

31) ダルダネラ劇団 (Opera Dardanella) は、ベナン生まれのロシア人俳優ウィリー・ピエドロによってオランダ領東インドで1926年に設立された歌謡劇団。ピエドロの妻でジャワ人女優のデウィ・ジャと華人歌手タン・チェンボクを看板役者に、東ジャワを皮切りに世界各地を巡業した。オリジナル脚本のほかハリウッド映画の翻案を手がけた。劇団の演目は後に映画『アチェのレンチョン』(1940年) や『村の娘』(1949年) として映画化されている。

団³²⁾、グランド・ヌーラン・オペラ³³⁾といったオランダ領東インドの劇団の巡業公演が行われた。入場料は高かったが、アブドゥッラーはしばしば劇場スタッフの目を盗んで入場料を支払わずに観劇した。初めて見た演目は『ミナンカバウの獅子』(Singa Minangkabau)で、ほかに『ジャワの美しき蛇』(Ular Cantik dari Jawa)や『マタラムの剣』(Keris Mataram)を見た。下宿先のシャム人の姉に連れられて観劇することもあった³⁴⁾。

『キングコング』(1933年)や『巨星ジークフェルド』(1936年)³⁵⁾をはじめとするアメリカ映画に触れ、ヘンリー・フォンダやクラーク・ゲーブルといったアメリカ人俳優にあこがれた³⁶⁾。エジプト映画『白いバラ』(1933年)では、イスラム教の本場の国のエジプト人が歌い踊る様子に驚いた。香港映画は出演者がアロースターを訪れた。

新聞や雑誌への寄稿に関心が向いたのはこの頃のことだった。英華学校の華人教師がシンガポールで刊行される雑誌『学生』(Student)に寄稿しており、掲載された記事を見せてもらっていた。『学生』は人気雑誌で、定期購読者は記念品にもらうロゴ入りの文具を自慢することができた。そのペンパル会員はシンガポールやマラヤにとどまらずアチェにまで広がっていた。

英華学校には華人の新聞記者が寄宿しており、アロースターで起こるできごとを『ストレーツ・エコー』(The Straits Echo)³⁷⁾に署名入りで寄稿していた。アブドゥッラーは、記者が劇場に無料で出入りできるこ

とと、新聞や雑誌に名前が載って離れた場所にいる人に自分のことを知ってもらえることがうらやましかった。アブドゥッラーはアロースターのサッカーの試合結果を英語の記事にして『ストレーツ・エコー』に投稿し³⁸⁾、『ワルタ・マラヤ』(Warta Malaya)、『マジュリス』(Majlis)、『サウダラ』にもサッカーの試合の記事を送った。新聞を買うお金がなかったために掲載されたかを確かめることができず、試合結果が掲載されているのを見つけても署名がないため自分の記事だと人に証明できなかった³⁹⁾。

小説の執筆を始めたのは英華学校に通いながらアロースターで友人たちと暮らしていた頃のことだった。友人が持ち帰った紙束の中にあったマレー語小説の冒頭の文章を見て、それに続く一説がふと頭に思い浮かび、本に書き込んでみた。このとき、自分は作家になる才能があるのではと思ったものの、どんな用紙に書けばよいのか、いきなり出版社に送ってよいものか、掲載してもらうにはお金を払う必要があるのかといった疑問があり、作家になるために何から始めればよいかわからなかった。

英華学校が閉校するとの噂が流れる中、7年生の最終試験を受け、アブドゥッラーは無事卒業することができた⁴⁰⁾。英華学校は閉校になり、アロースターに英華学校があったことを知る者さえいなくなる状況で、英華学校の卒業証明書だけで職探しをしなければならなくなった。スンガイリマウを拠点に職探しを続け、制服を着る仕事にあこがれていたために鉄道員や警察官の仕事に応募したが、応募者が多く、後ろ盾のないアブドゥッラーは採用されなかった。

職探しの傍ら、アブドゥッラーは雑誌や新聞への投稿を続けた。スンガイリマウの小学校に『サハバット』を定期購読している教師がいたことから『サハバット』を愛読するようになり、『サハバット』に寄稿するようになった。英語雑誌の記事から着想を得て作ったマレー語の詩⁴¹⁾やスンガイリマウのニュース記

32) ボレロ劇団は、ダルダネラ劇団の俳優バフティアル・エフェンディと劇作家アンジャル・アスマラによって1936年に設立され、マラッカを拠点に1945年まで活動した。バフティアルは1906年に西スマトラのパダンで生まれた。無声映画『ニヤイ・ダシマ』(1932年)を監督してオランダ領東インド初の原住民出身の映画監督となった。1950年代前半はインドネシアの国营映画会社で映画制作を手掛けた。1950年代半以降、スマトラを拠点に決起したPRRI(インドネシア共和国革命政府)反乱に共鳴し、スカルノ政権への反発から活動の拠点をイタリアに移した。

33) グランド・ヌーラン・オペラ(Grand Nooran Opera)の看板女優は、キンタ出身で『踊りの女王』と称されていたMenah Yemだった[Khoo 2005: 235]。ショウ・ブラザーズの系列の娯楽場で公演することを条件にショウ・ブラザーズから資金援助を受けて発足した。

34) マラヤのライトフェザー級チャンピオンだったボクサーのKid Ahmadが出演するグランド・ヌーラン・オペラの演目だった。

35) 1932年に死去したブロードウェイ・ミュージカルの興行王フーレンツ・ジークフェルドの半生を描いたアメリカ映画。

36) このほかにFred Astaire, Shirley Temple, James Cagney, Tyrone Power, James Steward, Spencer Tracy, Dorothy Lamour, Bob Hope, Bing Crosby, Bette Davies, Joan Crawford, Marlene Dietrich, Jean Harlow, Rita Hayworth, Dick Powellの名が挙げられている[Abdullah 1985: 192]。

37) ベナンで華人系出版社により1903年に創刊された英語紙。

38) 英語があまり得意でなかった所以他の記事を真似て書いた[Abdullah 1985: 185]。

39) アブドゥッラーは掲載された記事は手直しされていたと述べており、実際にはアブドゥッラーの記事が掲載されたのではなく、同じニュースをほかの人が執筆したものだった可能性がある。

40) 最終試験で一番の成績を修めたのは華人だった。試験に不合格だった人もいた。不合格者の多くはよい家柄の子で、校長にピストルや短剣をつきつけて強引に卒業証明書を出させた[Abdullah 1985: 202-203]。

41) 「バラの花」(Bunga Melati)や「ゴミ箱」(Tong Sampah)といった詩が掲載されたという[Abdullah 1985: 209]。

事⁴²⁾を送った。大きな街であるアロースターやスンガイタニの記事が載らずにスンガイリマウのような片田舎の記事が載るのが痛快だった。署名記事でなかった⁴³⁾し、記者証も持っていなかったけれど、記事を書く側に仲間入りした気持ちになった。

アブドゥッラーは『サハバット』を通じて『サハバット』の寄稿者や読者と文通も行うようになった。マラヤ・ペンフレンド同盟の会員になり⁴⁴⁾、ペナンのスンガイアラに住むアルマディ・アスマラ (Almahdy Asmara, 本名はAhmad Ismail) と文通を始めた。『サハバット』や『ワルタ・マラヤ』にアルマディの詩や記事が度々掲載されているのを読み、あこがれて手紙を書いたところ返信があり⁴⁵⁾、以後、毎週のように手紙をやりとりする仲になった。また、祖父の親類縁者かもしれないと思い、ペラのシティアワン在住の読者にも手紙を書いてみた⁴⁶⁾。

アブドゥッラーの処女作とされる小説が執筆されたのもこの頃のことだった。『サハバット』にアフマド・ヌルがアドナン・アルフィクリ (Adnan Al-Fikri) 名義で執筆していた人気短編小説「村の娘」(Anak Dara Kampung) に着想を得て、アブドゥッラーは小説「村長の娘」(Binti Penghulu) を執筆して『サハバット』に投稿した。『サハバット』からしばらく音沙汰がなかったが、「村の娘」の連載終了後、1939年8月23日に次号の連載小説として「村長の娘」の広告が掲載され、アブドゥッラーは自分が書いた小説が採用されたことを知った。アブドゥッラーはその広告が掲載された号を買って友人に配ったが、広告にはアブドゥッラーの名前が記されていなかった⁴⁷⁾ ためになかなか信用してもらえなかった。アブドゥッラーはアロースターの友人の家⁴⁸⁾で第二作目の「財産と将来の伴侶は英国に」(Harta dan Jodoh Menanti di England) を執筆し、ロスラニ・アシキン (Roselani Ashikin) 名義で投稿した⁴⁹⁾。クダの家族がメッカ旅行の際にベドウィ

ンに襲われ、同行していた赤ん坊と離れ離れになるが、赤ん坊は石油採掘業のイギリス人一家に拾われ、イギリスで育てられてサッカー選手として成功し、クダに戻って家族と再会するという内容だった。

書くだけでなく読むことも熱心に続けていた。1939年に刊行が開始された『ワルタ・キンタ』(Warta Kinta, 「キンタの報せ」)⁵⁰⁾ を購読し⁵¹⁾、『ワルタ・ジュナカ』(Warta Jenaka, 「コミック・ニュース」)⁵²⁾、『ワルタ・アハド』(Warta Ahad, 「日曜の報せ」)⁵³⁾、『ウトゥサン・ザマン』(Utusan Zaman, 「時代の使者」)⁵⁴⁾などに掲載されていたアブドゥル・ラヒム・カジャイ (Abdul Rahim Kajai)⁵⁵⁾の短編小説に興味を持っていた。カジャイの小説は最後を詩で終わらせ、その末尾の行を故意に消して読者にあてさせる趣向が人気だった。

執筆しながら職探しも続け、アブドゥッラーは求人情報が充実していた『マラヤ・トリビュン』(Malaya Tribune)⁵⁶⁾の広告を見てパハン州の会社によるイギリス製品の通信販売の営業を請け負った。順調だと思われたが、注文をとって集金したにもかかわらず商品が届かなかったために村にいづらくなった。ちょうど断食月明けが間近な頃で、『サハバット』がジェルトン (Jelutung) で会員を集めて断食明けのお祝いの集会を催すことを記事で読んでおり、行きたいと思ったが交通費がなかった。また、毎年の断食月明けには父が子どもたちにサロン (腰巻) を新調してくれるのに、この年は自分だけ新調してくれないことがわかってショックを受けていた。父親から預かったお金を持ち逃げして元手とし、通信販売の営業を請け負った会

50) 1937～1941年にペラでマレー鉱業社の資金援助を受けて「民族、ビジネス、知識、読み物を扱う新聞」として刊行されたジャウイ週刊紙。刊行当初はスマトラのランカット出身のラジャ・マンスル・アブドゥル・カディル (Raja Mansor Abdul Kadir) が編集を担当した [Hamed 2015: 91]。

51) ただしお金は払わずにすませた。

52) 1936～1941年にシンガポールでワルタ・マラヤ社から刊行されたジャウイによる娯楽雑誌 [Hamed 2015: 87]。

53) 1935～1941年にシンガポールでワルタ・マラヤ社から刊行されたジャウイ誌。当初はオン・ジャアファルのもとで「イラスト入り週刊誌」として刊行されたが、1935年末からサイド・アルウィ・サイド・シェ・アルハディが、1936年からはサイド・フセイン・アリ・アルサゴフが編集を担当するようになった [Hamed 2015: 81]。

54) 『ウトゥサン・ムラユ』(Utusan Melayu, 「ムラユの使者」)の日曜版として1930年にシンガポールで刊行が開始されたジャウイ誌 [Hamed 2015: 99]。

55) 1894～1943年。ウトゥサン・ムラユ社の設立者の一人で、「マレー語ジャーナリズムの父」とされる。

56) 1914～1951年にシンガポールで刊行されていた英語の日刊紙。

42) 農業試験場を訪問し、その訪問記を投稿した。

43) 筆名はpenulis budiman (聡明なる筆者) と記された。

44) 会員番号は30番だった。

45) ジャウイのきれいな字でしたためられたはがきが返信された。

46) アブドゥッラーによれば、ペンフレンド会員の住所は、ブキットムルタジャム (Bukit Mertajam)、ペナン、バガンスライ (Bagan Serai)、クアラカンサー、ディンディン (Dinding) が多かった。

47) 広告には筆者の名前は記されておらず、また、アブドゥッラーも投稿の際にアインバニヤハ (Ainbanyaha) という筆名を用いていた。

48) アラブ系の裕福な家庭で、電灯と大きな机があった。

49) 1940年1月10日から1940年3月26日まで38回連載された。

社の住所を頼りに、鉄道とバスを乗り継いでパハンに向った。アブドゥッラーにとってパハン行きは、住み慣れたクダの地と両親の保護から抜け出し、広い世界を求める旅の始まりだった。

おわりに

アブドゥッラーが幼少期を過ごした1930年代のマラヤ北部地方は、イギリス植民地下で流入した華人やインド人に加え、マラッカ海峡対岸のスマトラ、とりわけアチェからの移民が居住する混成社会だった。そこで暮らす人々から伝え聞く体験や伝承を通して、また、マラヤ内外から到来する書籍や定期刊行物を通して、さらには映画や劇団の巡業公演やサッカーなどのスポーツ大会を通じて、アブドゥッラーの生活世界は生まれ育った地域を大きく越えて広がっていた。

アブドゥッラーが触れる出版物は、ペナンをはじめとするマラヤで刊行されるマレー語出版物にとどまらず、インドネシアの出版物や欧米の小説のマレー語翻訳小説、さらにはシンガポールやロンドンから届く英語の新聞など多岐にわたった。アブドゥッラーは貧しい職人の子であり、奨学金にも恵まれなかったため、書籍を購入したり観劇したりするための十分なお金を持ちあわせていなかったが、本稿で見てきたように、社会階層や民族の違いを越えてさまざまな場所に出入りして、それぞれの場で流通していた出版物を読むことが可能だった。当初は読んだり見たりする立場にない者による盗み読みだったかもしれないが、覗き見を通じてアブドゥッラーは生活世界を越えた範囲の人々と地域についての知見を蓄えていった。

新聞や雑誌には、書き手の名前とマラヤ内外の所在地が記された記事や小説、そして文通コーナーがあった。アブドゥッラーは誌面を通じて作られるコミュニティに自らも参加したいと思い、新聞や雑誌を読み漁る中で、見よう見真似で短報や短編小説を書いて寄稿した。アブドゥッラーの自伝からは、読む経験から始まり、やがて自らも書くことを通じてその場に参加したいという欲求が育まれていったことを見て取ることができる。

参考文献

- Abdullah Hussain. 1985. *Sebuah Perjalanan*. (Edisi Kedua). Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- Hamed Mohd Adnan. 2010. “Penerbitan Majalah Agama sebelum Perang Dunia Kedua: Antara Tanggungjawab Sosial dengan Perniagaan”. *Sejarah*. (Jabatan Sejarah Universiti Malaya). 18. pp.87-110.
- Hamed Mohd. Adnan. 2015. *100 Akhbar Melayu*. Kuala Lumpur: Legasi Press.
- Kahn, Joel S. 2006. *Other Malays: Nationalism and Cosmopolitanism in the Modern Malay World*. Singapore: NUS Press.
- Khoo, Salma Nasution. & Abdur-Razzaq Lubis. 2005. *Kinta Valley: Pioneering Malaysia's Modern Development*. Perak: Perak Academy.
- Kratoska, Paul H. 1998. *The Japanese Occupation of Malaya: A Social and Economic History*. London: Hurst & Company.
- Muhammad Haji Salleh. 2016. “Perkembangan Kegiatan Ilmu dan Sastra di Pulau Pinang.” In Muhammad Haji Salleh (et al.) (eds.). *Masyarakat Melayu Pulau Pinang dalam Sejarah*. Pulau Pinang: Universiti Sains Malaysia. pp.73-120.
- Reid, Anthony. 1979. *The Blood of the People: Revolution and the End of Traditional Rule in Northern Sumatra*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Rosli Talif & Abdul Rahim Marasidi. 2010. “Charting Malay Literary Studies and Malay Self-Identity”. in Rick Hosking (et al.). *Reading the Malay World*. Kent Town: Wakefield Press. pp.15-28.
- Zeti Aktar Jaffar (ed.) 2008. *Abdullah Hussain dalam Esei dan Kritikan*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.
- 坪井祐司 2016 「1930年代初頭の英領マラヤにおけるマレー人性をめぐる論争：ジャウイ新聞『マジュリス』の分析から」『東南アジア 歴史と文化』45, pp.5-24。
- 左右田直規 2018 「植民地史の換骨奪胎：イブラヒム・ハジ・ヤーコブとマレー史の再構築」小泉順子編『歴史の生成——叙述と沈黙のヒストリオグラフィ』京都大学学術出版会, pp.107-151。